

diversity  soccer

はじめに

「サッカーするの、やめちゃったんですか？」

ある日のオンラインミーティングに、ひさしぶりに来てくれた元スタッフの言葉です。

もちろん、やめてません(笑)。

でも、2021年度は、サッカー以外のことにたくさんチャレンジしました。

わたしたちは、「生きづらさを抱えた人たち」のためにサッカーを通じた居場所づくりをする理由として、3つのことを掲げています。

ひとつめは、自由です。

誰にでも自分の好きなことを、その人なりに楽しむ自由がある。その第一歩として、サッカーを自由に楽しんでほしいのです。

ふたつめは、仲間です。

人と人のつながりの中に身を置いて、自分の存在が認められること。サッカーでは、多くの言葉を交わさなくても、お互いを認め合う仲間に会えます。

みつめは、発見です。

失敗をおそれずチャレンジし、その経験を通じて新しい自分を見つけること。新しい楽しみ方や、仲間が普段見せない顔に気づいたり。サッカーには、そんな発見が満ちています。

新型コロナウイルス感染症によって、大勢の仲間が集まり、サッカーを通じて自由を感じ、新しい発見をする機会を持つことが、とても難しくなりました。

そんな中で2021年度にチャレンジしたのは、それでもなんとか対面で集まってサッカーをする機会を作ること、そして対面で集まらないのなら、オンラインでも自由に楽しく仲間とつながり合う新しい形を模索することでした。

そうして、個人参加型のイベント「ダサCo-sal」や、オンラインでのホームレス・ワールドカップ同窓会、第一回ダイバーシティサッカーフェスティバル「SUMMICCO(すみっこ)」などを実現することができました。

特に「SUMMICCO(すみっこ)」では、サッカーだけでなく、本当に多様な楽しみ方で、多様な自己表現を、できるだけ多くの人にしてもらおうことを目指しました。

オンラインでつながり合うことが難しい仲間には、それを助けるための基盤づくりをハード、ソフト両面で行いました。自由・仲間・発見を求めた試行錯誤の末に、私たちが再確認したことは、、、

「やっぱり、サッカーしたいよね！」

ということでした。

そこで2022年度は、3、4チームが定期的に交流するリーグ戦「ダイバーシティリーグ」の創設にチャレンジします。

みなさまのご支援と参加をお待ちしております！

ダイバーシティサッカー協会
代表理事 鈴木直文

2021年度の主な活動

2021年度も、昨年度に引き続き、新型コロナウイルスとそれに伴う緊急事態宣言等の影響で、「ダイバーシティカップ」を開催できず、「野武士ジャパン」の練習も休止せざるを得ない期間が多くありました。しかし、各地のパートナー団体や参加者、そして新たに加わったインターンやプロボノとともに、つながりを維持する取り組みを模索しました。

「野武士ジャパン」では、通信機器を貸しオンライン環境を整え、練習休止中のプログラムへの参加を促しました。また、「ダサCo-Sal」という、個人参加型のフットサル交流会を感染予防の上で実施。ダイバーシティカップに代わる機会をなんとかオンラインでも！と「オンライン・ダイバーシティサッカー・フェス SUMMICCO(すみっこ) 2021」を企画しました。eスポーツ大会や、各地のパートナー団体から寄せられた動画の配信、オンラインハーフタイムショーなど、多岐に渡るプログラムを行いました。

海外との関わりでは、最後に日本代表チームを派遣した、ホームレス・ワールドカップ・パリ大会から節目の10年を迎えることから、オンラインでの関連イベントを開いたほか、関係者のレフェリー講習会への参加のサポート、他国の団体との情報共有を継続しました。

また、ジャパントイムズやデカトロンなど、新たな企業とのコラボも行われた1年でした。

2021年度の主な活動一覧

2021年	
5月9日&17日	千葉『共に暮らす』フットボール協会主催 オープンリーグ運営協力
7月	インターンやプロボノが参画
7月6日	ホームレス・ワールドカップのレフェリー講習会に、関係者2人が参加 (pp.4-5)
10月2日	オンラインイベント「ホームレス・ワールドカップパリ大会から10年 ～選手、コーチ、ボランティアと振り返る～」(pp.8-11)
10月23日	ダサCo-Sal開催@東京 pp.6-7
10月	Chromebook&通信機器の貸出事業を開始@東京 (pp.34-35)
11月13日	「ホームレス・ワールドカップ」ルール体験会&ダサCo-Sal開催@東京 (pp.4-7)
12月3日	「JFAグラスルーツ推進・賛同パートナーカンファレンス2021」に代表・鈴木が登場
12月4日	SHARP労組フットサル大会参加@東京
12月9日	ジャパントイムズのイベント 「Roundtable: Sustainability with Ross Rowbury #15」に代表・鈴木が登場
12月14日～23日	「オンラインダイバーシティサッカーフェス SUMMICCO2021」開催 (pp.14-33)
12月25日	スポーツブランドのデカトロンから、サッカー用品が寄贈
2022年	
1月8日	オンラインイベント「ホームレスサッカーのコーチングから考える、 みんなが楽しむサッカーとは？」(pp.12-15)

教えて、佐竹コーチ！

2021年7月6日、「Homeless World Cup Online Referee Course (ホームレス・ワールドカップ オンラインレフェリーコース)」が開催され、パキスタンやインド、ノルウェー、スウェーデン、ロシア、南アフリカなど世界各国から関係者が参加。ダイバーシティサッカー協会からは、佐竹コーチがこの講習に参加しました。11月13日には、佐竹コーチの指導のもとでホームレス・ワールドカップ・ルールの体験会が開かれました。ホームレス・ワールドカップ、そしてそのルールとはどのようなものなのでしょうか？ 講習に参加し、ルール体験会を主催した佐竹コーチに聞きました！



講習はどのような内容だったのですか？

全世界から集まったみなさんと一緒に、ディスカッションを交えながらホームレス・ワールドカップのルールを学んでいきたいと思いますというのがこの講習の趣旨でした。ホームレス・ワールドカップで審判をされていた方を講師にお迎えして、その方からレクチャーを受けたり質疑応答をしたりして内容を学び、最後にはその日の学びの復習としてクイズをしましたよ。



そうだったんですね！では、ホームレス・ワールドカップのルールと普通のサッカーのルールの違いについて、特に印象的だった点はあるですか？

印象的だったのは、『1人だけ相手の陣地に残らなければいけない』ということと、『壁当てOK』という2つのルールです。もちろんゴールを狙い、脚でプレーするなど、サッカー・フットサルとの共通点も多くあります。しかし、ホームレス・ワールドカップのルールがストリートサッカーからきているということもあり、少人数で楽しめて壁当てもできるなど、サッカーやフットサルとはまた違った面白さがあるゲームになっていると思います。



その後、ホームレス・ワールドカップ・ルール体験会をおこなったそうですね。これはどのような経緯で開催されたのでしょうか？

もともとダイバーシティサッカーに関わる方の中で、ホームレス・ワールドカップのルールを体験する場を開きたいねということをお話していたんです。今回の講習会をきっかけに、過去のホームレス・ワールドカップの大会にでた歴代の先輩たちが感じた喜びや感動をもっと身近なところで感じてほしいなということで、ルール体験会を行う運びとなりました。



当日はどのような練習を行ったのですか？

4対1の鬼ごっこや背面ゴールでのゲームなどをおこなった後に、ホームレス・ワールドカップのルールでゲームをしました。相手陣地に1人残すルールや壁当てのルールを採用しましたよ。

参加した方からは、『敵陣に1人残らないといけないというのが意外に難しい…。同じ人だけが残るのはあまりよくないと思ったので、チーム内でのコミュニケーションがもっとできればよかったなと思いました』、『初めてホームレス・ワールドカップのルールを体験して、頭がついていかなかったです。できれば本当に同じコートで体験もしてみたいと思いました。楽しかったです』などの意見をもらいました！



ルール体験会について、佐竹コーチご自身の感想をお願いします！

当日の会場は周りを壁ではなくネットで囲まれていたので、当初の予定ではゲームの際に壁当てのルールは採用しない予定でした。しかしプレイヤーの方から『壁当てルールでやってみよう』との声を頂き、実際にそのルールも体験してもらおうことができました。このように、ルール体験会に参加してくださったプレイヤーの方と互いにコミュニケーションをとりながら開催できたのがとても嬉しかったです。学校や仕事でも同じですが、1人で何かを成し遂げることは難しいですね。そこで、実際に現場に居合わせた人の様子を配りながらコミュニケーションをとっていくことが大事になると思います。今後ホームレス・ワールドカップに関わっていくうえでも、こうしたコミュニケーションや気配りということを大切にしていきたいと思っています。



ありがとうございました！

聞き手：山田 諒さん (協会インターン)

ダサco-sal

主にダイバーシティカップ参加経験者のために、多様な社会的困難を抱えた当事者同士が直接交流できる機会として、チームではなく個人で参加できるフットサル(個サル)を東京で開催しました。これが、ダサco-sal(ダイバーシティサッカー個サルの略称)です。交流の頻度と親密さを増すことで、参加者それぞれが日常生活でも自分らしくいられる支援をおこなうことを狙いとしています。本年度は、10月23日、11月13日の2回、東京都江東区のみずノフットサルプラザBumBで開催しました。

第1回

第1回となる10月23日には、野武士ジャパン東京チームのメンバーやボランティアの方々を中心に16名が参加。天気に恵まれ、快晴のもとで開催することが出来ました。

まず自己紹介をかねてアイスブレイクをおこない、様々な話題で盛り上がりました。その後、ウォーミングアップとしてブラジル体操、パス練習をし、ウォーキングサッカーのミニマッチを行いました。そして最後に通常のルールでフットサルをし、ダウンストレッチと振り返りで1日を締めくくりました。初対面の人も多い中での開催となりましたが、それを感じさせないほど打ち解けてプレーしていた様子が印象的でした。

またこの日は、コーチとして練習を組んだり運営のサポートをしたりと、インターン生の活躍も見られました。

第2回

2回目の開催となった11月13日には、合わせて19名の方に参加いただきました。この日は、以前からダイバーシティカップに参加されていて、現在はフットサル場で働いていらっしゃる松平さんをコーチとしてお招きしてco-salを開催しました。

まずアイスブレイクをしたのちに、相手の名前を呼んでパスを出すウォーミングアップをおこないました。その後、このウォーミングアップを応用したゲームをおこない、最後に1セット7分で試合をおこないました。その後、余った時間で任意参加のミニゲームをおこないましたが、最後までほとんどの方が参加していて、参加者の方々が楽しんでいる様子が伝わりました。

2回目のダサco-salでコーチを務めた松平さんに、ダイバーシティサッカーと出会ったきっかけなどを聞きました！

私は中学校までサッカーをしていたのですが、病気になってしまったので、中高とあまりサッカーと縁のない時間を過ごしていました。しかし、高校を卒業して、またサッカーをしたいなと思って個サルなどに行っていたんですね。同時に就労支援の相模原サポートステーションに行くようになって、そこで初めてダイバーシティカップに参加したんです。初めて参加したのは味の素スタジアムで開催された第4回大会だったと思います。このときは相模原サポステに来てすぐだったので、「参加してみるか」と言われて何も考えずに参加したような感じで、子どものように初めから終わりまで楽しんだという印象があります。ただ、多摩センターで行われた第5回大会では少し違っていました。出場するにあたってどういう思いで参加するのか相模原サポステのメンバーと話し合ったりしていましたね。そうしてダイバーシティサッカーに関わるなかで、ダイバーシティサッカー協会が個サルを開催するからコーチをしてみませんかと言をかけて頂きました。そうして今回ダサco-salでコーチをすることになりました。

当日には名前を読んでパスを出す練習をしたのですが、これは当時僕が相模原サポステに居たときにやっていたことなんです。なぜこんな単純なことをするのかというと、やはり名前を呼んで相手のことを知って交流をすることが大切だと思うからです。名前を読んで相手の顔を見てパスを出すということは、相手のことを知る第一歩なのではないでしょうか。

ダサco-salに参加してみて思ったのは、まず、単純にすごく楽しかったということです。現在僕はフットサル場で運営のアルバイトをしているのですが、運営をしていく際にどうしても全体を見られないところがあるんです。そのため、大人のスクールで運営をすることは苦手でした。そうしたことから今回のダサco-salにも不安があったのですが、あんなに楽しんでもらえるんだと思って自信になりました。また、僕の欠点についてはあれですけど、途中から調子に乗ってしまうんですね(笑)ちょっと無理にヒールリフトしてみたり、また抜きをしてみたり。でも、今回はそういうのがあまりなく自然にプレーできました。

これからもこのコミュニティの企画で機会があれば声をかけて頂ければと思います。今後は、参加者でありながら、ちょっとだけでもお手伝いさせていただければ嬉しいです。

参加者の声

- ・こうしてたくさんの方がつながって関わり合えることって結構少ないと思います。それが個人的にすごく嬉しかったです。
- ・なかには数年ぶりに会うという方もいらっしゃいましたが、こうしてみなさんに会えたことが何よりうれしかったです。



インターンの声



山田 諒さん

参加者のコメントのなかでも特に印象的だったのが、久々の再会を喜ぶ声でした。新型コロナが蔓延し、様々な分野で対面での活動が制限されるなかで、こうして顔を合わせることで、一緒にボールを蹴る機会の重要性を感じる2日間でした。

あれが人生・キャリアの転機だった。 共有できる過去とその仲間がいることの大切さ —「ホームレス・ワールドカップ パリ大会」を振り返る



ホームレス状態にある人だけが参加できる「ホームレス・ワールドカップ」というフットサルの世界大会がある。毎年、世界約50カ国から500人以上の選手が参加し、出場選手の9割以上が「大会参加により人生が変わった」と答える魔法のような大会だ。日本代表チーム（2009年より野武士ジャパンの名称で活動）はこれまでに3度の出場経験（2004年、2009年、2011年）があるが、今回、2011年のパリ大会でキャプテンを務めた松田良啓さんとの再会をきっかけに、当時のコーチやボランティアを交えたオンラインイベントが開催された。

熱狂のパリ大会から10年。日本のホームレスサッカーの転換点であり、2017年に発足したダイバーシティサッカー協会の原点とも言える同大会を、当時の選手、関係者とともに振り返った。

大会から10年、取り戻した普通の生活。 今の自分があるのはワールドカップのおかげ

「ホームレス・ワールドカップは、自分にとっては大きな転機。人生、1度は終わった人間がこうして普通の生活に戻ることができて、今があるのはワールドカップのおかげです」

パリ大会でキャプテンを務めた松田さんは、そう言って10年前とほとんど変わらない元気な顔を見せた。リモートでつないだ大阪の自宅には当時の野武士ジャパンのユニフォームも飾られている。大会中、手首を骨折してまで奮闘した松田さんに贈られたレフェリー賞のバッジも大事にしているとのことで、「10年経っても、あの大会のことは忘れられない」と語る。

大会当時、松田さんはチーム最年長の49歳。家族の失踪届から10年以上が経ち、戸籍上ではすでに死亡認定され、「この世に存在しない人間

だった。だが、ワールドカップのピッチに立つために、唯一の肉親と連絡をとり、戸籍を回復してパスポートを取得。松田さんにとってワールドカップの出場は、自らの存在を取り戻すプロセスでもあった。大会後はビッグイシューの販売者を卒業したため、音信が途絶えていたが、紆余曲折を経て、大阪で2015年から地下鉄の清掃の仕事に従事。業務の責任者も任されていたという。

「選手時代は日本代表としていろんなメディアの取材を受けていたこともあって、大会が終わったらちゃんと自立して社会復帰しなければと思っていました。それはプレッシャーではありましたが、自分としてはそれがいいバネになって、普通に就職して普通にアパートに住む生活ができるようになった。当時のメンバーとは大会以来会っていませんが、元気になっているのかなという思いと同時に、ステップアップして普通の生活に戻って来てくれたらいいなと思っています」

惨敗、葛藤、衝突……。 選手はエッフェル塔の下で大喧嘩

野武士ジャパンにとってパリ大会は、とりわけ葛藤の多い大会だった。野武士ジャパンは過去のワールドカップでも1度も勝利したことがなく、「悲願の1勝」が松田さんをはじめ7名の代表選手の目標だった。が、結果は0勝13敗、得点19、失点125。参加国48チーム中最下位という惨敗に終わった。若さとテクニックに勝る各国チームに大量点を奪われ、惨敗し続ける中で、チーム内では選手間の意見が激しく対立。時には胸ぐらにつかみかかる一触即発の場面もあるなど、チームは崩壊の危機にも直面した。

「ぶっちゃけ大変で、しんどい面はありましたね」と松田さん。

「たぶん、みんな初日の試合が終わった時点で、他国とのレベルの違いを感じ、ここで勝つのは難しいかもしれないと思ったのではないのでしょうか。でも、いろいろな人たちの支援を受けてパリまで来たんだからあきらめるわけにはいかないし、自力で一勝したいとみんなが思っていたからこそ、結果がでなくてモヤモヤしてぶつかり合ったのだと思います。自分としてもキャプテンとしてなかなかチームをうまくまとめられなかったし、骨折して途中からはピッチの外からしか応援できなかったのも、悔しさがありませんでした」

チームの雰囲気は日ごとに悪くなる中で、コーチ陣も難しい対応を迫られた。東京チームでコーチを務め、大会ではサブコーチの立場で指導した蛭間芳樹さんは、「もともと代表チームは東京と大阪の合併チームで、大会前の合宿時から小さなイザコザはあった」と振り返る。

「ただ、さすがにパリまで行っていきなり喧嘩はないだろうと思ってたんです。同じ目標を持ったチームの仲間なわけだから。ところが初戦がアルゼンチン戦で、最初からほとんど勝てる見込みのない大会に来てしまったことをまざまざと見せつ

けられた。それで、エッフェル塔の下で選手同士が大喧嘩するんです。逆に言うと、現地に行って初めて本当のコミュニケーションがとれたのかもかもしれません」

「選手とどう向き合うべきか、当時はコーチ陣もすごく議論して悩みました。勝つためのサッカーをするのか、楽しむためのサッカーなのか。そもそもホームレスサッカーの一番のミッションは自立ですから、中高生の部活みたいにコーチがベタベタ関わるのもおかしいし、かといって喧嘩になった時にどこまで介入するのか、距離感が難しかった。その時に監督の與那さんと話したのは、選手が目標に向かっていては我々から投げ出すことだけはやめよう、葛藤や衝突を見守りながらも、とにかく応援はし続けようということでした」

「支援」の枠を超える「ホームレス×サッカー」。 最後は肩を組んで涙。温かいものが生まれた

そんな不安定なチームの様子をピッチの外から見ているのが、ボランティアメンバーとして帯同していた竹上沙希子さんと北野里実さんだ。

パリ在住の竹上さんは、夏季休暇のボランティアで日本チームの通訳サポーターとして参加。大会事務局とチームをつないだり、取材のコーディネーターなどを精力的にこなしたが、現地の目線から見た日本チームは新鮮だったという。

「他の国のチームはどこもお祭りのような雰囲気なのに、日本チームだけは毎回試合後に円陣になって反省会をしていて、本当に日本人は真面目だなあと感じました。それに、なによりみなさんが熱かった。本性がむき出しというか、みんな飾らない姿で本音のコミュニケーションをしていました。人も交わされている言葉という意味でも、ビジネス通訳では見られない面白さがありました」

竹上さんは日本チームを通じて、ホームレス問題についても考えさせられたと話す。



上段(左から)：長谷川さん(司会)、北野さん、松田さん
下段(左から)：稗田さん(聞き手)、竹上さん、蛭間さん

「ホームレスが多いフランスではその姿はある意味、日常の景色なので、当事者とガッツリ話すということはなかったのですが、松田さんをはじめ選手の方々がそれぞれの背景などをフランクに話していただけたのは貴重でしたし、普通の人たちなんだという驚きがありました。それと同時に、大会を見る立場として最初は支援する側される側とか、自分の感情は同情なのか愛なのかみたいなことを考えたりしたのですが、サッカーはそういう思考を超えたところで純粋に楽しむことができ、心の底から選手たちを応援できるのがすごく良かったですね」

また、大会にはチームをケアする医療ボランティアや学生ボランティアなどさまざまな立場の関係者も帯同。その調整・橋渡し役を担った北野さんは、東京チームの裏方ボランティアとしてホームレスサッカーの活動を支えてきた一人だが、葛藤するチームを気にかけてながらも、スタッフやコーチとは違う目線で選手の変化を見ていた。

「大会前の合宿からサポートしていましたが、共同生活をしていると、コートの中ではぶつかった二人が宿舎では協力して掃除をしていたり、違った一面が見えるんです。最初はお互いの名前も呼ばなかったのに、徐々に下の名前やあだ名で声を掛け合うようになってきて、合宿の後半頃には少し打ち解けた感じがありました」

「パリに行ってから、さらにもう一段階距離が近づいて、本音でぶつかり合う中で少し心配になることもありました。本当に選手の方々は真面目な方ばかりで、みんな負けたくないという思いが強かったからこそだったのかなと思います。大会が終わる頃には合宿の時とは比較にならないほどお互いの仲が近づいて、みんな肩を組んで涙を流しながらキャプテンの松田さんの言葉を聞いていたのがとても印象的でした。サッカーでは惨敗したかもしれないけど、最後にはチームの中に温かいものが生まれたと思います」

パリ大会を起点に、「戦う」ことから、サッカーを通じた「居場所づくり」へ



応援する当時のボランティア

熱く葛藤したパリの経験は、その後のホームレスサッカーの在り方に大きな影響を与えた。翌年の2012年にはホームレス・ワールドカップで交流を深めた韓国チームとの間で日韓戦が韓国で開催され、野武士ジャパンは再び海を渡った。そして、その後、野武士ジャパンは紆余曲折を経て、ホームレス・ワールドカップ出場にこだわらない、サッカーを通じて誰もが自分らしく生きられる場づくりへと大きく舵を切り、2017年にダイバーシティサッカー協会が発足することになる。

大会後もホームレスサッカーに関わり続けてきた蛭間さんは、その変遷をこう振り返る。

「パリ大会の時は、試合に勝つことを目標にしていたので、特に東京のメンバーは暑い日も関係なく、とにかくこたま厳しい練習をしていました。それで選手たちも確実に上達はした。でも、日韓戦が終わって、次はどうするか、またワールドカップを目指すのかとなった時に、本当にこれがみんなのためになっているのかと立ち止まって考えたんです。正直、ワールドカップは我々コーチ陣が出場しても勝てないかもしれない、半端ないレベルでしたから。戦うのもいいけど、それよりもサッカーを通じた日常的な居場所づくりや仲間づくりの方が大事なのではということで、徐々に活動がシフトしていきました」

「現在のダイバーシティサッカーは、ホームレス状態の人だけでなく、ひきこもり経験者や精神障害、依存症、LGBTなど多様な背景を持つ人たちが参加するプラットフォーム的な役割を果たしていますが、そうした活動に転換したきっかけは、一つには野武士ジャパンの練習にさまざまな立場の人が集まるようになったことがあります。それと、日韓戦の時に国籍を超え、女性も含めたチーム編成で行ったミックスゲームが非常に楽しかったというのも、ひとつのヒントだったと思います」

パリ大会への参加を起点に、ホームレスサッカーは他団体を巻き込んだダイバーシティサッカーへと大きく発展したが、今回のオンラインイベントでは野武士ジャパンのパリ大会参加を資金面で



試合の様

援助した「独立行政法人 国際交流基金」の担当者も参加。同基金の原秀樹さんにより、初めて当時の支援決定までの内幕が明かされた。

「パリ大会があった2011年はちょうど東日本大震災があった年で、日本企業の寄付がみんな東北支援に回って、ワールドカップに行けそうにない……という話がある人から相談されて、それならなんとかしましょうと言ったのですが、実は内部的には反対の声もありました。そもそも野武士ジャパンの活動は、我々がサポートする事業としては前例がありませんでしたから。ただ、当時は私自身、キャリアの中盤に差し掛かり、国際交流事業の意義について疑問を抱いていた時期でもあったので、『これ以上意義ある国際交流はありません』と主張して決意を通した記憶があります」

「今日のみなさんの話を伺って、パリ大会からいろんなことが始まったということで、今になって思えば、あの野武士ジャパンのパリ大会こそが、人の人生にインパクトを与え得る国際交流の在り方、つまりは当時の私が悩んでいた『国際交流事業の意義』への一つの解だったと思えます。自分のキャリアの中でも一つの転換点だった気がします」

人生の転機、居場所、つながり、再会……。4者それぞれの10年を語る

イベントの最後には、パリ大会から10年目のそれぞれの感慨が語られた。人生の転機、居場所、つながり、そして再会……。4者の言葉からは、ホームレス・ワールドカップがホームレスの人生のみならず、関わった人々の人生・キャリアにも大きなインパクトを残し、それがゆるやかながらも強い紐帯となっていることがうかがえた。

(北野さん)

「10年ぶりに松田さんとお会いできて、元気でいてくださったことがなにより嬉しかった。当時は本当にいろんな立場でパリ大会に関わってくれた人がいて、そういう人たちの力で徐々に今のダ



懸命にプレーする当時の松田さん（中央）

イバーシティサッカーにつながるものがつくってこられたのかなと思いました。定期的にこういう場が開催されればいいなと思います」

(竹上さん)

「私はこの10年で、野武士ジャパンの練習に参加したり、フランスのホームレス支援団体に話を聞きに行ったり、仕事では日本のホームレスを題材にしたフランス人芸術家の通訳をさせてもらったこともあり。今も通訳の仕事をしていて、特にソーシャルビジネス関連の話が好きなので、自分にできることはないかと日々考えていますが、そうしたことのきっかけはやっぱりパリ大会だったなあと今日、改めて思いました」

(蛭間さん)

「ホームレスサッカーに関わるようになった当時に振り返ると、私自身、会社というか世の中がイヤになっていて居場所を探していたようなところがあり、そういう意味では私もこのチームに救われたという思いがある。こうやって同じ現場を体験した人たちが10年後に集まって話ができる関係性が、このチームの魅力。共有できる過去があり、その仲間がいるということが、とても大事にすべきコンセプトだと思う」

(松田さん)

「普通、ホームレスになるということは、いろんなつながりを切っていくということだけど、今の自分にはこうやって再会を喜び合える人たちがいる。私は、もうすぐ還暦。ホームレス状態の時はいつ死んでもいいと思うこともありましたが、今はもう少し長生きしてみたい。コロナが落ち着いたら、みんなでもたサッカーをしたいし、一杯飲みながら楽しく話したいです」

(文：稗田和博)

すべての差異を取っ払うことで 生まれる面白さを追求してきた。

—ホームレスサッカーのコーチングと誰もが楽しめるサッカー—



ホームレス支援のひとつとして、「ホームレスサッカー」という試みがあるのをご存知だろうか。食料や住まい、就労などの従来支援だけでは実質的なホームレス状態からの脱却は難しいと指摘される中で、サッカーを通じた支援で当事者の人間関係や生きる喜び、楽しみを取り戻そうとする取り組みだ。日本ではビッグイシュー基金を母体とするチーム（野武士ジャパン）が2008年から本格的に活動を開始。その10年以上にわたる実践の積み重ねは、仲間はずれを生み出さない“誰もが楽しめるサッカー”を追い求める歴史であった。

みんなが楽しむサッカーとは、何か？ 今回、野武士ジャパンのコーチングを振り返るオンライントークイベントが開催され、歴代ボランティアコーチ5人が参集して熱い議論が交わされた。

2008～2011年

ホームレス・ワールドカップへの派遣

競技性を追求するも、矛盾が噴出。
正解が分からないまま前に進んだ

長谷川（司会） 今日日は「ホームレスサッカーのコーチングから考える、みんなが楽しむサッカーとは？」というテーマで、歴代5人のコーチにお集まりいただきました。

最初に視聴者向けに情報を整理しておくとして、ホームレスサッカーはホームレスの人だけが参加できるフットサルの世界大会「ホームレス・ワールドカップ」に日本代表チーム（野武士ジャパン）を派遣するところから始まります。2009年のイタリア・ミラノ大会、2011年のフランス・パリ大会の参加を経て、2012年の日韓戦、そして2015年から始まる国内大会「ダイバーシティカップ」へと変遷してきました。

その間、コーチも時代ごとに世代交代して指導方法もすいぶん変わってきたと思いますが、その時々でみなさんがどのようなコーチングをされ、どんな工夫や悩みがあったのか。まずはミラノ大会やパリ大会について、当時を知る與那さん、蛭間さん、大石さんから口火を切っていただけますか。

蛭間 パリ大会の時は、全敗したミラノ大会のリベンジで、少なくとも1勝はしたいということで、コーチングとしては戦えるチームにする、つまりは競技性を追求したサッカーを意識していました。東京チームと大阪チームでは多少温度差がありましたが、東京について言えば暑いなかでもしこたま練習をして、それこ

そ部活みたいな練習をしていました。東京と大阪の合同練習も必要ということで、夏には静岡で合宿もして、合同チームでポジションやフォーメーションはもちろん、選手間の関係性づくりなども一生懸命やった記憶があります。

與那 ただ、実際の大会では競技レベルが違いすぎて大変でしたよね。例えば、カンボジアチームなんかは中高生ぐらいの活発な少年たちでしたし、若くて屈強な欧米のチームもあれば、身体能力の高い黒人選手のチームもある。驚いたのはプロサッカーのセネガル元代表なんかもいたりしましたが、そんな中で平均年齢が40歳近い日本チームが戦うわけですから苦労も多かった。

国によってホームレスのなり方がぜんぜん違うので、いろんな選手がいるというのはワールドカップの面白さですが、同じピッチで戦うという意味ではなかなか難しいものがありました。

大石 パリ大会の難しさは、競技性を追求したことと、コミュニケーションの問題があったと思います。例えば、普通の少年サッカーだと、小学生の間はワイワイやるサッカーで楽しさを体験して、中学生以降に競技性を追求していく流れですが、野武士ジャパンはいきなり世界の舞台に立たされて戦うというところにちょっと無理があった気がします。しかも、選手はほとんどサッカー未経験者で、練習はやっても週に1回程度。サッカーの土台がないままに勝ちにいこうとしたところに矛盾が出てしまった。

それと、選手たちはいろんな背景がある中でもともとコミュニケーションが苦手な方が多いので、試合で

ポコポコにされた時に心が折れてしまったり、あきらめた選手もいたりして、チーム内で喧嘩や怒鳴り合い、つかみ合いのようなこともありました。チームとどう向き合ってまとめていくのか、コーチングが非常に大変だった印象があります。

蛭間 コーチとはいえ、ボランティアだという点も悩ましいところでした。やはりビッグイシューが母体として活動しているチームですから、一義的には「選手の自立」というミッションが最優先課題としてある。その上でスタッフがどう動きたいのか、コーチの役割はどこまでなのか、探り探りだったところはありましたね。

長谷川（司会） 大会前の合宿の時に、ホームレスサッカーの目的は「自立」だけでも、選手やチームの目標も必要だろうということで、選手たちは「最後まであきらめない」という目標を立てました。その時に、スタッフの私やコーチに課されたのは、選手たちが「あきらめない」という目標を立てた以上、私たちからあきらめることは絶対にしないということでした。

だから、選手があきらめたようなプレーをした時などには、私たちもかなり厳しく指摘したりしましたが、いま振り返ってみると、選手の自主性とは言いながら、無理に目標を立てさせてしまった側面はあったのかなと思います。

大石 パリ大会は、とにかくトライアル的な部分が大きかったと思います。われわれとしても何が正解なのか分からないまま、いろんな葛藤を抱えながら、とりあえず前に進んだ。そこで、いろんな現象が出てきて、それを踏まえた上で、次はどうしたらいいのかと考え、少しずつやり方が変わってきたように思います。

挑戦する姿に心震わせ、負けても楽しむ。
選手の「もう1度」の声で、日韓戦開催へ

長谷川（司会） 一方で、ホームレスサッカーのコーチングでは、どんなやりがいや楽しさがあったのでしょうか。

與那 僕は基本的な考え方として、スポーツというのは競技性が前提で、お互いが勝つことを目指してやらないと楽しいものにならないと思っています。勝利を目指すんですけど、でも負けた時も相手を尊重してお互いにたたえ合うというのがスポーツの価値だと思っています。だから、対戦相手が若くて屈強な外国人で、とてもかないそうにない相手であっても、それに立ち向かって、果敢にチャレンジする日本のおじさんたちの姿に僕はすごく感動しましたし、惨敗しても「意外にボールとれたね」とか「あの得点は良かったね」と一つひとつの成功体験を讃えるようにしていた。

勝つために試合をするんだけど、その挑戦する姿に心を震わせ、負けても「あいつら、半端なかったね」と言い合って楽しむ。そのスタンスは、ミラノでもパリでも基本的には変わりませんでした。

蛭間 やりがいの答えになっているか分かりませんが、ワールドカップを経験された選手は確実にサッカーが上手くなったというのはあります。これは絶対に

そう、どう考えても上手になった。それと、フィールドの中だけじゃないんです。大会で選手たちは10日間ほどパリで共同生活を送り、行きも帰りも同じ飛行機に乗っていると、それまでバラバラだったメンバーと一緒に観光に出かけたり、少しずつチームの結束ができるというか、いいコミュニティになっていきました。それは、競技以外での良い成果だったと思います。

実はそれが次の日韓戦につながるのですが、大会後にもう一度韓国チームと対戦したいという意見が選手から出てきたんですね。もう1回ピッチに戻りたいとか、もう1回あのメンバーでサッカーをしたいというのが選手から出てきたというのはとてもいい収穫というか、僕自身も含めて良かったことの一つだと思います。

大石 僕個人としては、自分がその場にいたり、アクションを起こすことで、周囲の人たちにプラスの影響を与えられるというのが、野武士ジャパンに限らず、自分のコーチとしてのやりがいです。特に、野武士ジャパンの選手たちは、コミュニケーションが少し苦手だったり、お互いの関係性をつくることに消極的だったりするので、コーチとしてはより大きな役割が果たせる。蛭間さんが言ったように、選手はパリ大会で確実に変わりましたし、僕自身で言えば、どうすればより良い影響を与えられるかと真剣に考えたのがパリ大会後だったように思います。

2012～2014年

日韓戦と楽しむサッカーへの転換

サッカー以外の時間をつくる。
多様な人が楽しめる場づくりの実践

長谷川（司会） みなさんからも話が合ったように、ホームレス・ワールドカップは海外選手との年齢差や体格差など、日本選手にとってはかなりハンディのある大会でした。なので、もう少し国内で身近な目標が持てた方がいいのではないかとということで、パリ大会以降は大会参加や普段の練習の在り方も変わってきたと思いますが、その変化についてはいかがですか。

蛭間 個人的なことと言うと、日韓戦の時にオフィシャルな対戦をしたあと、両国のコーチ対決をして、さらに韓国の女性スタッフも加わったミックスゲームをやったのですが、それがすごく楽しかった。日本の場合、女性のスタッフはピッチの外で見ることが多かったですから。

それと、韓国で見たビッグイシューカフェもすごく印象的で、路上生活者と一般の人が垣根なく入り交じって一つの居場所になっている感じが面白かった。

それで、ちょうど日韓戦後は、スタッフの長谷川さんがお休みしていて、大石コーチもイギリスにサッカーコーチ留学に行ってしまったので、残ったメンバーで話して、ちょっと練習メニューを変えてみたんです。この指とまれゲームとか、アイスブレイク的にお互いのコミュニケーションがとれるような遊びを取り入れて、サッカーなんだけど、サッカーをしない時間を少しつくりました。そんな試行錯誤をしている時に、イギリスでいろんな練習メニューを学んできた大石さんが帰ってきたという流れでした。

大石 日韓戦後にそんな葛藤があったのは、今日、初めて知りました。僕が野武士ジャパンに帰ってきたのは2013年の秋ぐらいですが、その時、ちょっと違和感があったんですね。どんな違和感かというと、サッカーをしている人たちがぜんぜんキラキラしていないとか、みんなこれで本当に楽しいのかな？と率直に思ってしまった。その内訳を紐解いてみると、やっぱり冒頭にお話した競技性の追求とコミュニケーションの問題なんじゃないかと。

その頃には、ひきこもり支援の団体やボランティア体験の人なども多く参加していて、毎回初めましての人たちも含めてゴチャッと練習をしていたので、そら毎回知らない人がいたら緊張もするし、そもそもコミュニケーションが苦手な方々が集まっているわけですから、自分のことを否定されやしないかと不安にもなるよなと思ったんです。

それで、毎回初めましての人たちも含めてみんなを笑顔にするにはどうしたらいいかと考え、練習の最初にアイスブレイクを採り入れるようにしました。やっぱりお互いに名前を呼び合うとか、ハイタッチするとか、手でパスをし合うというのがあると、お互いの壁がなくなりますから。

長谷川（司会） 鬼ごっこやバスケットボールみたいなことをしたり、フラフープを使って競争したり、サッカーではない時間が増えた印象は僕もすごくありました。そういう時にはサッカーで目立つ人とは違う人が活躍したりしていましたし、お互いを名前呼び合ったり、休憩時間のコミュニケーションもずいぶん増えましたね。

大石 実際にやってみると、お互いの垣根がなくなり、自然発生的にパス交換したりボール回しをする人たちが増えてきて、それを見た時に、これこそがすべてなんじゃないかなと直感的に思いました。別にサッカーがうまくならなくても、そこに場や関係性が生まれて、相互に作用し合っているというのが大事なんじゃないかと。

それで、僕自身もワールドカップを目指すんじゃなくて、ホームレス状態の人を含めたいろんな人たちがお互いを尊重し合ってその場を楽しめるようなトレーニングを考えるようになり、長谷川さんや蛭間さんとも話をしながら、徐々にダイバーシティサッカーへとつながっていったのかなと思います。

2015～2022年 ダイバーシティサッカーとこれから

アイスブレイクを取り入れ、 多様性を具現化した場づくりへ

長谷川（司会） 最初のホームレスサッカーから紆余曲折を経て、2015年には第1回の「ダイバーシティカップ」が開催されます。これは、ホームレス状態の人だけでなく、ひきこもり経験者や精神障害、依存症、LGBTなど多様な背景を持った人たちが参加する国内大会で、現在のダイバーシティサッカー協会の活動につながるものですが、この頃にコミットしてくれたのが、のちに東京のコーチになる瀬川さんでした。

瀬川 僕は蛭間さんとのご縁でホームレスサッカーを知りました。最初はホームレスがサッカーをするってどういうことなんだろうと思いましたが、サッカーをすることで前向きに生きることにつながるという点に面白さを感じて参加させていただきました。

すでにダイバーシティカップが始まっている時期だったので、歴代のコーチがどういう意図をもって指導してきたのか学ばせていただきながら、さきほども話に出たアイスブレイクなども採り入れて、参加者が普段の生活を忘れて楽しめる場、前向きにチャレンジできる場の提供を心がけていました。

やりがいとしては、参加者に「本当に楽しかったです」と言ってもらえると僕自身も嬉しいですし、次の練習を楽しみにしてもらうことで、生活のサイクルも前向きになると思うので、良いサイクルをサッカーでつくり、いろんな方々の希望の場所になればということ意識していました。

長谷川（司会） サッカーの勝ち負けだけを目標にせずに、一人ひとりが安心感をもって楽しめる場をつくらうというコーチの方々の実践の中で、少しずついろんな人が参加しやすい土壌ができてきたように思います。佐竹さんは、最初は大阪でコーチをされていたが、いかがですか。

佐竹 僕は大阪と東京の両方でホームレスサッカーのコーチを経験していますが、東京と大阪では参加者が随分と違う印象があります。

大阪は当事者よりもボランティアなど支援者の参加が圧倒的に多くて、最初は「これ何の集まり？」みたいな感じで、支援する人とされる人の両者をどうミックスするかということにフォーカスして練習を考えていた気がします。

逆に、東京はボランティアよりも当事者や元当事者の方が多いので、大阪でやっていたアイスブレイクや練習メニューをもう少しシンプルなものにしていくというのが、自分の中での工夫としてありました。

ただ、薄々感じていたことですが、僕は支援する人とされる人を勝手に分けて考えちゃっていましたが、やっていくうちに実は支援する側の人も当事者と同じような悩みを抱えていたりすることがあるのが分かってきて……。それならば、本当にダイバーシティというか、多様性を具現化した場づくりをしていく必要があるなと思ったというのが大阪から東京へと移って行く中で感じたことでした。

長谷川（司会） 佐竹さんは女子中学生のサッカーも指導されていますね。通常のコーチングは定期的に集まる固定メンバーに対して行うものであるのに対し、野武士ジャパンの場合は毎回、名前も知らなければ、どういう背景の人かも分からない人たちが偶発的に集まってくる。場の作り方も難しそうです。

佐竹 たしかに通常のコーチングは固定メンバーですし、メンバーと過ごす時間の長さも違います。ただ、これも結局、競技性を追求する女子サッカーと社会性が主軸になるようなホームレスサッカー（あるいはダイバーシティサッカー）とで最初はバッサリと分けて考えていたところがあるのですが、やっていく中でほとんど同じような部分が見えてくるんです。

やっぱり競技性の中でやってる女子中学生も、いろいろ考えたり悩んだりして、行き詰まっているところもあるので、そういうことを理解した上で温めていくとか育てていくというところはホームレスサッカーに通じるかなと思います。

サッカーで喜怒哀楽を共にする。 その経験を得られたことが“勝ち”

蛭間 今の話を聞いていて、僕らがコーチとして関わっていた頃も、練習ごとに来るメンバーが違うので、ああすればいいとかこうすればいいとか決まったことはなかった気がします。むしろ、このホームレスサッカーは毎回来る人が違うから面白い。その場その場でコミュニティを設計するというか、配慮しながらケアするのがコーチの役割なのかなと思います。

大石 たしかにそうですね。日本サッカー協会のグラスルーツ宣言では、誰もがいつでもどこでもサッカーを身近に心から楽しめる場を提供すると言っているのですが、それって例えば小学生であれば、何年生かによってある程度レベル分けやランク分けをしたりして、大学生や社会人は「大人」というようなカテゴリー分けをしているんです。でも、このダイバーシティサッカーの活動は、そうした年の差だったり障害だったりという諸々の背景をすべてぶち壊したところで、いろんな人が集まって楽しめるサッカーを提供している。それこそがダイバーシティの素晴らしさで、枠とかカテゴリーを取っ払うことで生まれる面白さを提供する活動として今後もやっていければいいのかなと思いますね。

長谷川（司会） 最後に、視聴者から「サッカーにおいて勝つことと楽しむことの両立は難しいのか」という質問が来ています。ホームレスサッカーは、当初の競技性サッカーから誰もが楽しめるサッカーへと大きくシフトしてきた経緯がありますが、今後、ホームレス・ワールドカップの出場も含めてどのように展開していけばいいのか、コーチの方々のご意見をいただければと思います。

大石 僕は、競技性サッカーと誰もが楽しめるサッカーの両立はできると思います。ただ、競技性を追求したサッカーを育てていくには、やはり時間がかかると思う。

蛭間 僕は普段の銀行業でもよく言っているのですが、物差しを2つ持とうと。つまり、その時々で試合をすれば、勝ちにこだわってみんなプレーするんだけど、もっと長い時間軸で考えれば、あの時の試合がどうだったとか、パリ大会で大もめしたよねとか、経験談を語り合える。そのことが楽しいんであって、最終的にはサッカーを通じて喜怒哀楽を共にする経験を得られた、その自分が“勝ち”なんだと思う。

與那 そもそもスポーツの定義が勝ち負けを決めるゲームであって、勝つために頑張らないとあまり意味がない構造のものなので、そこで勝ったり負けたりで楽しめるということはありますが、ワールドカップとい

う意味で言うと、やはり野武士ジャパンの競技レベルがどの辺にあるのかというのは重要なポイントだと思う。それを国内で突き詰めて、その先にワールドカップの社会的意義みたいなものに接続できればベストだなとは思いますが。

大石 世界の檜舞台に立つワールドカップの非日常性が、ある種ショック療法的に人を劇的に変えるのだとすれば、普段あまり競争がない人にとってはワールドカップのような大会があってもいいのかもしれないし、逆に競争にさらされている人にとってはダイバーシティカップのようなオフになれる大会がいいのかもしれない。そこは、われわれコーチ陣が参加者をよく見極めて、その時々で良い選択をしていく必要があるんだと思います。

瀬川 僕はいつも参加者の最大公約数を考えてコーチングしているのですが、サッカーが上手な人もいれば、未経験者もいる、年齢も中高年から学生までさまざま、男女の性別も違うよといった時に、それでもルールさえ設定してあげれば、みんなが楽しめる場ってつくれると思うんです。ルールを設定すれば、いろんなチャレンジの仕方があるので、みんなが楽しみながら競える。だから、競技性か楽しむサッカーかみたいなのに0か100かじゃなくて、参加者のいろんなバックグラウンドや能力を取っ払った上でみんなが楽しめるサッカーを目指せばいいと思うし、野武士のサッカーはそれをやっていると思っています。

大石 ウォーキングサッカーなんかは、すべての差異を取っ払って楽しめる一つの方法ですよ。一番の理想は、いろんな背景を持った老若男女が集まってサッカーをやって、お互いがリスベクトしあって関係性をつくりながら楽しめる場をつくっていく。そんな非日常の光景が、サッカーを活用すれば日常に変えていけると思います。

（文：稗田和博）

登壇者一覧

司会：長谷川知広 元野武士ジャパンコーディネーター、NPO法人ダイバーシティサッカー協会理事。	大石友則 大学院でサッカーコーチ論を専攻、ホームレス・ワールドカップのバリ大会にコーチとして参加。イギリスでのサッカーコーチ留学を経て、野武士ジャパンの東京チームのコーチとしてダイバーシティサッカーへの変遷を支える。
與那安貴 学生時代にビッグイシュー日本でボランティアを行い、2008年より野武士ジャパン大阪チームのコーチを担当。ホームレス・ワールドカップのミラノ大会（2009年）ではコーチ、パリ大会（2011年）では監督を経験。	瀬川純人 大学まで競技サッカーを追求し、その後はサッカーでの社会還元に軸足を移し、少年サッカーの指導などを経て、2016年より野武士ジャパンの東京チームのコーチを担当する。
蛭間芳樹 バンカー、ビッグイシュー基金理事、NPO法人ダイバーシティサッカー協会理事。2010年より野武士ジャパンの東京チームのコーチを務め、ホームレス・ワールドカップのバリ大会ではコーチを経験。ダイバーシティサッカー協会発足に尽力する。	佐竹城 大学サッカーで競技人生にピリオドを打ち、社会人2年目で野武士ジャパンと出会ったことをきっかけにサッカー指導者を志す。2017年に野武士ジャパンの大阪チーム、2018年より東京チームのコーチを担当する。

日々の練習から国内リーグ、ワールドカップへ。 ステップアップと晴れ舞台のある、なだらかな階段 をつくりたい

ダイバーシティサッカーの「これまで」と「これから」を語る



写真：横関一浩

スポーツを通じた居場所づくりに取り組むダイバーシティサッカー協会は、ホームレスやひきこもり、不登校、うつ病など多様な社会的困難を持つ当事者が交流するフットサル大会「ダイバーシティカップ」を開催してきたが、新たな交流イベントとして「ダイバーシティリーグ」を企画。今年7月にまず関西でリーグをスタートしたのを皮切りに、順次、東北や関東などの各地区でもリーグ立ち上げを目指す。

全国リーグの創設も視野にサッカーの可能性を追求する同協会の活動は、どこからきてどこに向かうのか。今回は、協会代表の鈴木直文さんと理事の川上翔さんのお二人と共に、活動の原点であるホームレスサッカーの足跡を振り返りつつ、「ダイバーシティサッカーのこれから」を聞いた。

ホームレスサッカーとの出会い

**最初の印象は「ゴリゴリ」「和気藹々」。
チームは過渡期で、大阪では存続の危機も**

——ダイバーシティサッカー協会は、ビッグイシュー基金が行うスポーツ・文化活動の一つであるホームレスサッカー（野武士ジャパン）を母体に2017年に発足しました。まず、お二人のホームレスサッカーとの出会いからお聞かせください。

川上 僕は大学時代に住宅支援を行うハビタット・フォー・ヒューマニティという国際NGOの活動に参加をしていて、国内でも何かできることはないかと思っている時に先輩がボランティアとして野武士ジャパンの練習会に参加していたので、その流れで練習に来たのが最初です。2010年頃のことで、当時はホームレス・ワールドカップに出場した選手やコーチも参加されていました。

その後、僕はオーストラリアに1年ほど留学するのですが、その時も現地でストリートサッカープログラム（ホームレスサッカー）に参加したりして、帰国後の2013年からビッグイシュー基金のインターン（のちにスタッフ）として本格的にサッカーに関わるようになりました。

鈴木 僕は2012年が最初です。ホームレスサッカーを主宰していたビッグイシュー基金の長谷川知広さんにお声がけいただいたのですが、その時は「東京にホームレス・ワールドカップを誘致したいので、ぜひ一緒にやりましょう」というオファーでした。当時は野武士ジャパンがホームレス・ワールドカップのパリ大会に出場した直後だったこともあって、チームの中でまだパリの火が燃えていて、すごく発展的な思考だったのだと思います。その流れで日韓戦が開催され、野武士ジャパンは韓国に遠征したのですが、僕もそこに関わらせていただきました。

——川上さんは大阪、鈴木さんは東京で、それぞれパリ大会後に本格的に関わるようになったわけですが、最初のホームレスサッカーの印象はどうでしたか？

鈴木 まず前提として、僕は2002年から5年間イギリスに留学して学位をとったのですが、貧困など社会的排除の問題にサッカープログラムで取り組むというのが研究テーマの一つでした。でも、当時、日本でそんな施策を行っている地域や団体はなく、研究対象も見つからず、ちょっと困っていました。ようやくスポーツの力を社会づくりに役立てようという動きがちらほら出てきたのが2010年ぐらいのことだったので、長谷川さんにお声がけいただいた時も、「ぜひ！」という感じでした。

で、最初に練習に参加した時はどうだったかという、けっこうガチでサッカーをやってるんだなと思いました。スパルタ的にゴリゴリ練習して、ミーティングでも一人ひとりの目標を言い合うという感じでしたから。そこから2~3年ほどのブランクがあり、再び顔を出した2015年の第1回ダイバーシティカップの時には以前のようなゴリゴリ感はなく、和気藹々とした雰囲気になっていました。

川上 大阪は逆に、パリ大会の前も後も変わらず和気藹々としていました。僕は最初に参加した時から面白い活動だなと思っていて、活発なオーストラリアのサッカープログラムも体験していたので、日韓戦後はだんだん参加者が減っていましたが、いろんな企画をしながら楽しくやれば良いなと思っていました。

——日韓戦後は明確な目標もなくなって、活動としては過渡期でしたね。

川上 僕がインターンとして関わり始めた時、大阪は参加者が3~4人なんてこともありました。それで目先を変えて、野球部をつくったら、販売者



日韓戦に参加した当時の鈴木（写真右）

の方々も年齢的にもサッカーより野球の方が身近なので、そっちの方が盛り上がりやすかったりして（笑）。もうサッカーはやめようかという話もありましたが、やめるのはいつでもできるので、とりあえずは続けてみようということの皮一枚つながった感じでした。

母体だったビッグイシュー基金の立場で言うと、資金的にも余裕がない中で、ミラノ大会（2009年）、パリ大会（2011年）、日韓戦（2012年）まではどうにかできたけど、当時は東日本大震災もあって、若者ホームレスや住宅政策の問題にも取り組む必要があったので、サッカープログラム以外の比重が高まっていったのだと思います。

協会誕生のルーツをたどる

**パリのトラウマがなければ、
ダイバーシティサッカーはなかった**

——今回、ダイバーシティサッカー協会は、活動の原点である「ホームレス・ワールドカップ パリ大会」と「ホームレスサッカーのコーチング」を振り返る2つのオンラインイベントを開催しました。いずれも協会誕生のルーツを探る興味深いものですが、お二人はイベントをどのように見られましたか？

鈴木 僕は二面性のある感想なのですが、ひとつはパリ大会を振り返るみなさんがすごく羨ましかった。異国の地で良いことも悪いこともいろいろあったと思いますが、選手やコーチ、ボランティアの垣根なく、あの時はこんなことがあった、あんなことがあったと言って語り合えるのはいいなあ、自分もその場において一緒に笑ったり感動したりしたかったなと素直に思いました。そういう晴れ舞台での共通体験があるからこそ、10年後にお互いが疎遠になっていたとしても、すぐにつながることができるし、関係性が持続的になれる。協会としても、そうしたみんなでき語り合える体験は



2014年に行われた大阪でのイベントの様子

ぜひつくっていききたいと思います。

もうひとつは、それとは真逆の感想になるのですが、良くも悪くもパリ大会の意味づけを必要以上に大きくしてしまったがゆえに、そのあとの活動がちょっとやりにくくなっちゃったんだよなとも思いました(笑)

川上 たしかに野武士ジャパンにとって、パリ大会は大きな成功体験であると同時に失敗体験でもあったんだろうなと思いますね。ファンレイズもすごく苦労したみたいだし、それこそ現地では惨敗して喧嘩になってチームのマネジメントに四苦八苦して、大会後もいろいろあって大変だったと言われる中で、じゃあ次は？となった時に「またあんな大変なことをしないとイケないのか」と、二の足を踏んでしまうところがあるのも否定できません。

——ホームレス・ワールドカップが、チームのトラウマになっている感じですね。

鈴木 特に僕は東京の人たちの語りの影響を受けてきたので、協会で「ワールドカップに行きたい」という話が出て、安易にやっちゃいけない！と論陣を張ってしまう。やっぱりパリと同じようなトラウマをつくりたくないですから。ちゃんと国内でのベースをつくった上でワールドカップの出場を考えたい。

川上 僕はビッグイシュー基金のスタッフになってからきちんと理解できたのですが、INSPというストリートペーパーの国際ネットワークがあって、そこでは日常的にコミュニケーションがあり、年に一度は世界中のストリートペーパーのスタッフが集まって各国のホームレス問題の現況や先進的な取り組みについて情報交換したりして、すごく面白い国際交流が行われているんです。実は、ホームレス・ワールドカップというのはそのINSPの国際交流の面白さを販売者であるホームレスの人たちにも体験させたいということもき

かけの一つだったそうなんですね。つまり、ホームレスの自立とか社会の偏見をなくすとか、ワールドカップの目的はいろいろありますが、始まりは「楽しいからやろう！」なんです。だから、ワールドカップの出場はそれなりにお金がかかるし、それに伴う責任も発生する話ではあるけれど、選手を送り出す側としてはもう少し軽いノリでもいいのかなとも思っています。

鈴木 今はワールドカップを考えることが、必要以上に重くなりすぎていますからね。

川上 ただ、ホームレスサッカーでいろんな葛藤がありながらも活動に関わり続け、模索しながら今のダイバーシティサッカーのカタチに昇華させてくれた人たちに対して、もちろん感謝の思いがあるし、すごくリスペクトもしています。

鈴木 そうですね。パリのトラウマがなかったら、今のダイバーシティサッカーはなかったかもしれないですね。

「ダイバーシティ・リーグ」の挑戦

みんながつながるフックとしてのサッカーの価値を高めたい

——ダイバーシティサッカー協会は、これまで参加者200人規模の「ダイバーシティカップ」を継続的に開催してきましたが、今年の7月からは新たに関西で「ダイバーシティリーグ」が始まりました。狙いは、どんなところにあるのでしょうか。

鈴木 「ダイバーシティカップ」の次は全国リーグの開催だよねという話はもともとあって、その前段として2020年には東京と大阪で30人規模の分散型交流イベント「ダイバーシティ・プレリーグ」を開催しました。残念ながら、予定していた宮城、千葉、神奈川の3地区は新型コロナの影響

で実施を見送り、沖縄はeスポーツ大会での交流になりましたが、コロナ禍でもリーグ開催の布石は打つことができました。

川上 その時に実感したのは、いつコロナでイベントが中止に追い込まれるか分からない中で、これまでのような200人規模のカップだと中止による打撃が大きすぎること。でも、随時2~3チームぐらいが集まるリーグイベントなら予定を変更しやすいというのも、リーグを推進する一つの理由でした。

鈴木 そもそもリーグの立ち上げは、従来のカップでは参加希望チームが増えすぎて溢れ始めていたことと、協力団体の中に全国リーグを熱望する声があったのがきっかけです。その上で、協会としてはさきほどのワールドカップの話とも関係するのですが、全国リーグで年間通じて大会を開催することで、ワールドカップに派遣する選手の有資格者を増やしていきたい。

ワールドカップはホームレスの自立をテーマにした大会の性格上、選手は人生に1度しか出場できないので、選手層が薄すぎると、チームを派遣した翌年にはもう出場する選手がいないということになりかねない。それでは継続性が担保できないので、プレーヤーの裾野を広げることで代表チームをつくりやすくしていくことも考えています。

それと同時に、国内リーグを充実することで、ワールドカップに出場できなくても、国内で活躍できる晴れ舞台の大会がたくさんあるという状態をつくっていききたいんです。普段の野武士ジャパンの練習の場があって、国内のリーグやカップの大会も用意されていて徐々にステップアップしていき、その先にワールドカップがあるというならかな階段をつくるというのが僕のやりたいことです。

川上 リーグへの挑戦は、みんながつながるフックとしてサッカーやスポーツの価値を高める努力

をしていきたいという意志の現れでもあると思います。というのは、ホームレスサッカーがダイバーシティサッカーへと変遷してきたプロセスは僕らが若者支援に引き寄せられた結果でもあって、サッカーを通じた居場所づくりがどんどん広がる中で、今では居場所的な機能が果たせるなら別にサッカーにこだわらなくてもいいという自由な空気があるんです。

でも、やっぱり今まで関わってくれている人たちが「面白い」と言ってくださるのは、僕らがサッカーやスポーツに一生懸命に取り組んでいるからだとも思っていて、自由な発想でいいと思う反面、ちゃんとサッカーで面白いものをつくる努力はしていきたい。そういう意味で、年間を通じてリーグを開催していけば、どんな価値や意味が生まれてくるのか、走りながら考えていきたいと思っています。

(文：稗田和博)



第2回ダイバーシティカップの様子



協会の設立準備委員会



東京でのダイバーシティ・プレリーグ



大阪でのダイバーシティ・プレリーグ



2022年に始まったダイバーシティリーグ

オンラインダイバーシティサッカーフェス SUMMICCO (すみっこ) 2021



2021年12月14日から12月23日まで「オンライン・ダイバーシティサッカー・フェス SUMMICCO (すみっこ) 2021」を開催しました。

2021年度も、コロナ禍でダイバーシティカップを開催できませんでした。それに代わる機会をなんとかオンラインでも！と企画したのが、今回のイベントでした。

ダイバーシティサッカーのコミュニティにつながる人たちが一堂に会して、それぞれの楽しみ方で楽しみ、つながりを確認できるように。そんな思いで、パートナーのみなさんと一緒にボトムアップで計画し、準備しました。

頂上にいる少数の人たちが話し合うのが「SUMMIT (サミット)」だとすれば、広い裾野の隅々から集まった大勢の人たちがみんな面白くことに挑戦するのが「SUMMICCO (すみっこ)」です。

コンセプトは「オンラインBBQ」。
河原でみんなでバーベキューをしているときのように、みんなが時間と空間を共有し、お互いの存在を感じ合っているけれど、よくみるとそれぞれが思い思いに楽しんでいる。食材を調達してくる人たち。火を起こそうとしている人たち。それを傍目に、そこら辺でキャッチボールをはじめめる人たち。それを嬉しそうにただ眺める人たち。そんな風に、楽しみ方は多様ですが、ふわっとみんながつながりを感じることができる。そんなオンラインイベントを目指しました。

10日間にわたり、多くの人が豊かな個性を発揮し、新たなつながりや、今後の展望が生まれました。

<実施内容>

- 12月14日 (火) 20時~21時 オープニングトーク「SUMMICCOって何?」
- 12月15日 (水) 14時~17時 第1回eダイバーシティカップ
- 12月16日 (木) 19時配信開始 ダサトーク! ~私たちはサッカー大好きプレーヤーです~
- 12月18日 (土) オンライン・ハーフタイムショー
 - 午前の部 10時~12時30分 パフォーマンスライブ~いろんな表現で交流しよう~
 - 午後の部 13時30分~15時40分 コトバ作品を味わう会 ~ダイバーシティサッカー曲づくり企画~
- 12月19日 (日) 14時~16時 天皇杯決勝戦観戦ツアー
- 12月21日 (火) 19時配信開始 ダサラジオ♪ アディショナルタイム
- 12月23日 (木) 21時~22時 クロージングトーク「ダイバーシティカップからダイバーシティリーグへ」

SUMMICCO (すみっこ) 2021 第1回eダイバーシティカップ

12月15日、ダイバーシティサッカー協会では初めてとなるeスポーツ大会「第1回eダイバーシティカップ」を開きました。宮城、大阪、沖縄で、子どもや若者を対象に居場所づくりや就労支援等をする3団体をオンラインでつなぎ、人気タイトル「大乱闘スマッシュブラザーズ」で計21人が対戦しました。

当日は、開会式および各団体の紹介ののち、8組に別れて総当たりのグループリーグで対戦。それぞれの上位、計16人が決勝トーナメントへ。最後は、ヨッシーを操るkukuluのムーミンさんが優勝しました。

参加者の声

中山さん (まきばフリースクール)

前々から子どもたちは、「沖縄とか、大阪の人たちとゲームするんだ」と楽しみにしており、今日もとても盛り上がりました。正直、沖縄のみなさんの「eスポーツ部」の部室みたいな雰囲気には、圧倒されましたが(笑)。子どもがゲームをすることに関して、もしかしたら親御さんなどは「画面に向かって何やってるんだろう」と心配になるかもしれませんが、いまのゲームは対戦の前に挨拶したり、誰かとつながるコミュニケーションツールになっていたりするんですね。今日も「大会があるなら、ちょっと来てみようかな」と、初めて来た子どももいました。孤立して一人でやるしかないからやってるゲームと、みんなと繋がりがながらやるゲームっていうのは全然違うという認識を持たなきゃいけないと思いました。

まきばフリースクール：宮城県で、不登校やひきこもり経験者等の生きづらさを抱える人やその家族を支援するため、フリースクールや自立援助ホームを運営する団体。

中町さん (コネクションズおおさか)

オンラインでこうやって他の団体さんとイベントをやったのは初めてなんですけど、みなさんの熱量がすごかったですね。この日のために準備したというメンバーもいて、一つの目標になったのが印象的でした。コネクションズおおさかでは、マイクラフトという自由に建造物を作れるゲームをしたりするのですが、この前モンサンミッシェル作った時なんかはリーダーシップをとる人がいたり、中には「残業」する人までいたりして、自然と役割分担や社会性みたいなものができたりもします。楽しいことや関心のあることから身に付くのは、効果としてすごく大きいなと思いました。

コネクションズおおさか：NPO法人育て上げネットが大阪で運営する、将来に不安を感じる若者とその保護者のための相談窓口。

フランさん (kukulu)

これまで、団体内でゲームの大会をすることはよくあったのですが、今日の参加者はオンラインで大会に参加するのは初めてという人が多く、みんな楽しんでました。第2回大会があれば、また参加したいと思います。実は、今の部屋とは別に、ゲーム用の部屋を作ろうとしていて、そこで大会とかをしたいと思っています。kukuluでは「1人でさせない」という方針があり、ゲームでも何でも、誰かと一緒にやるというのを掲げています。ゲームについて、今ではスタッフがなくても利用者同士だけで楽しんでいて、プロを目指すみたいなことまでは考えていないですけど、eスポーツをきっかけに、何か残せればと思っています。

kukulu：NPO法人沖縄青少年自立支援センターちゅらゆいが運営する、10歳~20歳前半の子ども・若者が集う居場所。

当日は、参加団体の代表者と、大会を振り返るトークライブも行いました。アーカイブで視聴可能ですので、ご興味のある方は、QRよりご覧ください。



QR
URL



<https://youtu.be/MxnzY4P6YiU>

SUMMICCO 動画企画

SUMMICCO 動画企画「動画×サッカー＝ラジオ!？」とは?

ダイバーシティサッカー協会の各地のパートナー団体から寄せられた動画をもとに、ゲストが思う存分に語り合うラジオのような企画を実施しました。第1部「ダサトーク!～私たちはサッカー大好きプレイヤーです～」と第2部「ダサラジオ♪アディショナルタイム」の2部構成となっており、第1部では「サッカー」を、第2部ではダイバーシティサッカー協会に携わっている「人」をテーマに企画が進行しました。

1 第1部「ダサトーク!～私たちはサッカー大好きプレイヤーです～」

ゲスト：菊地涼太さん、降屋守さん(トモフト)、山内俊哉さん(トモフト)

募集動画テーマ

- ① 自分にとってのサッカーとは
サッカーに対する思いや、向き合い方について参加者に語っていただきました。
- ② Our Favorite Play
失敗したプレー、おもしろプレー、ナイスプレーなど、サッカーに関する動画を広く募集しました。

動画リンク→<https://youtu.be/T1d8x1FKdNk>



2 第2部「ダサラジオ♪アディショナルタイム」

ゲスト：中西晶大さん、油井和徳さん(山友会)

募集動画テーマ

- ③ 団体紹介
パートナー団体さんに自団体を紹介していただきました。
- ④ Over Time
弊社に関わってくださっている方の日常にクローズアップしました。

動画リンク→https://youtu.be/-N2ih4_bVEI



ラジオ動画ができるまで

1/企画会議
「動画を使った企画」という漠然とした方向性だけ与えられた状態から、募集する動画のテーマをどうするか、それらの動画をどのように使うか、当日は誰に参加してもらおうかなど、企画をより具体的に考えていきます。

2/動画の公募
動画テーマ案が決定したら、SNSやメールを通して動画を募集します。約20本の動画が集まりました。

3/台本づくり
集まった動画をもとに、番組の構成を考えていきます。どの動画をどこで使ったら面白いかなど、ジンクルはどこで入れると切り替えがうまくいくかなど、様々なことを考慮して全体の流れをつくっていきます。

4/収録
台本ができたら、いよいよ収録に入ります。今回は2部構成だったため、2日に分けて収録しました。通信トラブルなどがあり、予想以上に時間がかかりました。

5/編集
余分なシーンをカットしたり、音楽や動画を差し込んだりして、視聴しやすいものに仕上げていきます。

6/公開
ついにYoutubeで公開です。

参加者の声

- 菊地さん** 皆さんの良いプレーだとか、心が熱くなるようなインタビュー動画を見て、こういうカッコいい大人になりたいと思いました。
- 山内さん** 動画を見て人として学ぶところがあって、フットサルやサッカーをこれから歳を取っても続けていきたいと思いました。
- 降屋さん** トモフトのみんなに動画撮影の思い出を語ってもらって、動画撮影自体が新たな思い出になったと言っていて良かったです。
- 油井さん** 動画の振幅が広くて、その点がダイバーシティサッカーらしさを感じられました。
- 中西さん** オンラインイベントって大体失敗したり外れたりすることが多いですが、これはめちゃくちゃヒットする感じで楽しかったです。またやりたいです。

インターンの声



比企裕子さん

この企画は、「動画を用いた企画」という大雑把な方向性だけ与えられた状態からスタートし、参加者の方と一緒に企画を考えていきました。その中で、絶対的な正解がないものをチームで作っていくことの難しさと楽しさの両方を味わうことができました。コロナ禍でも何かしら皆さんの活躍の場を設けたいという趣旨で始まった企画でしたが、その中で、数々の素敵な作品が生まれました。今まで通りに活動ができないと諦めるのではなく、できる範囲に目を向け、その中で何かやってみようという大切さを実感しました。そして、創意工夫しながら動画を撮影、編集してくださった関係団体の皆様、ご協力ありがとうございました。

天皇杯 JFA 第101回全日本サッカー選手権大会



参加者の声

Q 試合を観戦した感想は？

- ・会場の人の多さにびっくりしましたが、試合はとても迫力がありました。
- ・ドラマチックな試合展開で、とても楽しめた試合でした。
- ・頂上決戦だけあって、見応えがありました。
- ・サポーター、観客、スタッフを沸かせる素晴らしいプレーの連続に感動しました。
- ・見ていてとても楽しかったし、勉強にもなりました！

Q 今回のサッカー観戦イベントにはどのような意義があると思いますか？

- ・普段はなかなか出会えない方々と出会える機会になりました。
- ・大観衆による感動の共鳴・共感を体験し、疎外感を持ったり自分がコミュニティの一員だという感覚を得られにくいマイノリティ当事者にとっては有意義でした。
- ・周りの人と喜びを分かち合えたことです。

Q どのようなサポートや周囲の理解があると、スポーツに参加しやすい環境が作れると思いますか？

- ・体力や技術面を気にせずに体験できる環境があれば、参加しやすいです。
- ・貧困層や、初心者が気軽に親しめる環境を作るためには、経済的な補助があると参加しやすいと思います。
- ・特別扱いはされなく、あくまで多くの参加者のうちの一員として動けることで気兼ねなく参加しやすくなります。一方で、例えば男女別のチーム分けは、トランスジェンダーにとって苦しみにつながるので、最低限の配慮があると安心して参加できます。

当日の様子は動画でもご覧いただけます
<https://youtu.be/HxoACgMQmT0>



2021年12月19日、国立競技場で「天皇杯 JFA 第101回全日本サッカー選手権大会」の決勝戦が開催されました。日本サッカー協会（JFA）から招待いただき、「野武士ジャパン」から9名、「ゆどうふ」から2名、「よこはま北部ユースブラザ」から8名、女子中学生によるサッカーチーム「PIXY OTA」に所属の6名、セクシャルマイノリティ&アライ13名、ダイバーシティサッカー協会スタッフ3名の計41名が参加。多様な社会的背景を持つ方々が集まり、浦和レッズ対大分トリニータの試合を観戦しました。

午前11時30分、千駄ヶ谷駅に集合し、国立競技場へ向かいます。参加者全員で顔合わせをした後、会場の外周で催されている「JFA SDGs推進ブース」や「モルテン『MyFootballKit』ワークショップ」などを見て回り、いよいよ観客席へ。スタジアムグルメを味わいながら試合開始の時を待ちます。

天皇杯の決勝戦だけに、各サポーターも応援に熱が入り、スタジアムはかなりヒートアップ。キックオフ直後から試合が動くと、ますます会場は盛り上がりを見せました。参加者は真剣な眼差しで戦況を見つめつつ、試合が進むにつれて徐々に隣同士での会話も生まれていきます。ハーフタイムの時間には、さらにコミュニケーションが活発に。

試合は浦和レッズが1点リードしたまま終盤を迎えます。すると後半45分、土壇場で大分トリニータが同点に追い付き、アディショナルタイムへ突入。後半48分、浦和レッズに勝ち越しゴールが生まれ、2対1で試合終了。劇的な幕切れに、感極まる参加者も。会場は大きな拍手に包まれました。

インターンの声



高橋優奈さん

白熱した試合を生で観戦した参加者は、「ドラマチックな試合展開で、とても楽しめた試合だった」「頂上決戦だけあって、見応えがあった」「サポーター、観客、スタッフを沸かせる素晴らしいプレーの連続に感動した」と、目を輝かせました。中には、「試合を見ていたら、自分もサッカーをやりたいなってきた」と語る方も。

また、セクシャルマイノリティの当事者からは、「スタジアム内に男女共用の個室トイレがあることは、とても受け入れてもらえている感じがしました」「男だからとか女だからとかバイアスなく、スポーツ中も普段も、いつも同じように接して欲しいと思います」との声が寄せられました。

全ての人がかかわる使用できる設備、鮮やかなプレーに熱狂し、興奮を共有できる観客席。社会的背景にかかわらず、誰もが一人の個人として、スポーツを楽しむことができる環境の重要性を改めて感じる日でした。

ハーフタイムショー

SUMMICCO 2021も中盤に差し掛かった12月18日、ダイバーシティサッカー協会にゆかりのある個人・団体が集まって、オンライン・ハーフタイムショーを開催しました！午前の部では、様々な人がダンスや音楽など多様なパフォーマンス表現を通じて交流し、午後の部では、事前に募集した「コトバ作品」を、朗読、描画、ラップ、ダンスなどと組み合わせながら味わう会を行いました。ここでは、およそ5時間に及んだオンライン・ハーフタイムショーを写真とともに振り返ります。

午前の部 **10:00-12:30**
パフォーマンスライブ ~いろんな表現で交流しよう~



10:00-

オープニング (MC: みつい&綾)



10:30-

みんなでエクササイズ



10:50-

吉富さんによる講談[LIVE]



雑誌『ビッグイシュー日本版』の販売者で、玉玉亭秀 (たまたまてい・いっしゅう) という名で講談をしています。講談とは、張り扇で釈台を叩いてリズムをとりながら物語を進める一人話芸のことです。5分くらいでと言われていたのですが、緊張して「どこで切ればいいんや」という感じでしたね(笑)みなさん「続きが気になる」ですとか「面白かった」などと感想をくださって嬉しかったです。(吉富さん)

11:05-

子ども若者応援フリースペースによる手話歌などの披露[動画]

今回は、メンバーによるコント、リアクション芸、手話歌などを披露しました。企画を持ちかけたときにみんなからリアクションがあまりなくて「どうする！？どうする！？」と直前に慌てたものの、面白いものができたかなと思っています。(中塚さん)



11:30-

Kickin' Dance Fam によるいろいろなパフォーマンス[LIVE]

山形県の日本海側、鶴岡市で、子どもや大人ごちゃまぜで楽しくダンスをしている、ダンスグループのKickin' Dance Famです。ダンスやダンスのパフォーマンスなど盛りだくさんの内容でお届けしました。(Kickさん)



11:55-

Gibsonさんによるギター演奏[動画]

近年、人生の転機があり、久方ぶりにギターを弾き直していました。大体15年ぶりでしょうか。そんな矢先、今回のお話を頂けました。様々な思いや感覚が交錯したのですが、思案した末にチャレンジさせて頂く事にしました。事前録画での演奏をさせて頂きましたが、人前で何をやるにも小恥ずかしい気が引ける...そのような自分なのですが、様々な学びがありました。今回の個人的な体験は、自身を幾許か前進させたように感じます。自分の殻を少し破るような、微々たるながら人として成長出来たのかも...そのような心境です。この度は貴重な機会を頂く事が出来ました。ありがとうございました。(Gibsonさん)



12:05-

ダンスグループソケリッサより、山下さんによるダンス[LIVE]

2002年に結成されたグループで、ホームレス経験者からなります。今回のテーマは“自己表現”ということで、ソケリッサが普段していることを少しでも紹介できたらと思い、パフォーマンスを行いました。今回のパフォーマンスで自分の内側にあるものが少しでも見せられたらいいなと思いました。(山下さん)



午後の部 13:30-15:40

コトバ作品を味わう会

～ダイバーシティサッカー曲づくり企画～

ダイバーシティサッカーの曲を勝手に作っちゃおう！企画

1. 歌詞の元になる「あなたのコトバ」を募集する
2. コトバ作品を味わう会 ←いまここ
3. コトバをつないで歌詞をつくる
4. 曲ができる
5. みんなで演奏する

「あなたのコトバ」募集テーマ

- ① Can Change the Life
（ ）には自由にコトバを入れてください
- ② ボールは丸い / ボールはよく見ると丸くない
- ③ ダイバーシティと出逢う

Special Thanks to : aoinuさん

朗読 : はっせーさん

コトバ02: 佐々木さん

うつむくな 振り向くな 前を見て今を走ろう

コトバ06: 降屋さん

食べ物が出るフットサル大会があるらしい。それがダイバーシティカップを知ったキッカケでした。そんな腹ペコな動機で参加した第2回ダイバーシティカップですが、様々なバックグラウンドのチームと一緒にボールを蹴っていくなかで、多様性って豊かだな、そしてタダ飯って素晴らしいなど実感したのでした。

朗読+即興ダンスコラボ



ダンス: 山下さん (ソケリッサ) + はるみさん (Kickin' Dance Fam)

コトバ07: ゆどうふ (町田市) 朗読: みっちーさん

1個のボールを追っていると、背景とか役割、しがらみとか色々な背負っているもの、背負わされているものが取っ払われて、一人の人間と人間として出会える気がする

しゃべるってことも悪くないんですけど、100の言葉をかかわすより、1~2回何かと一緒にやると、通じることってあるじゃないですか、それがダイバーシティカップだったかな
同じ釜の飯を食うじゃないけど、この時代にあえて面倒くさいこと、人と会って何かをやるってことは大事だと思う

僕は初対面が苦手で、フリースペースでは時間をかけて、仲良くなっていくんですけど、フットサルって、一緒にプレーすれば、すぐにチームメイトになれるんですね。試合が始まる前は緊張していたのに、試合が終わったら笑顔でした

自分は良い“氣”をもらいました。自分も誰かに良い“氣”を渡せてたらいいな

コトバ13: イタリア最良さん 朗読: 降屋さん

業界の著名人が続々と投稿されている事に感化され、この度1つ“恥”を書こうと思い立ちました。

『ダイバーシティカップ』以前から度々耳にしていたこの響き。

当初“お台場”の何ぞやのフットサル大会かと大きく勘違いをしていた私。いやはや…無知を露呈してしまいました。まさに“恥”を書いています。。。私の初参加は“多摩センター”での大会。東京と神奈川。とりわけ小田急線沿いにはかつてご縁があったので、何となく向かうまでの過程に懐かしさもありました。

この日はとても寒い日でしたが、非常に良い天気だったとも記憶している。身の引き締まるような思いと、とにかく殆どの方を知らない訳だから不安を胸に赴いた。

かなりの人数が参加していた。80名程かな。大会が進んで行く何となく参加者の表情、表面を知る事が出来る。フットサルを介して相互に知り合う。“他者に関心を持つ事”から始まると思う。

最初はよそよそしいが、何となく挨拶して競技を進めて行くとチーム内外で会話が生まれる。この日全ての人と全てを相互に分り合えた訳ではないのだが、スポーツを行った事で何となくの親睦を図れたかと自分は勝手ながら思っている。

なんだか興味深い“行い”だ。

そんな行いであるスポーツは目的を持って用いれば、様々な可能性や魅力を秘めているはずだ。ひと昔前は、成績や競技力ばかりに視野が注がれていたと思われるが…昨今では、スポーツを介して他者や多文化を知る機会であったり、スポーツを通じて自身の人生に幅や深みを与える一助にもなると感じている。

まあスポーツをしていると良い事ばかりではないのだが、ただ時折垣間見える個人的な体験(貴重な時間)があるから、私は今日も続けているのかもしれない。帰路に着く際にそこそこ清々しい気分であれば、きっとその日は貴重な時間を覚えたのだ。つまりは“楽しめた”のだ。

ちなみにこの日の私。帰りは寄り道をして、若き日に下積み研鑽を積んでいた“厚木”にて仲間とホルモンを“コロコロ”してから帰路に着きました。寒かったし遠かったけど討って出て良かったよ。そんな“ダイバーシティとの出逢い”でした。

是非次回は“YOU”と“IPPON エンジョイ!!”

みんなでコトバ作品ラップ大会!

RAPレクチャー: 澤井さん (愛知)

うつむくな 振り向くな 前を見て今を走ろう【コトバ02: 佐々木さん】

ある日、誘われてやってきた野武士ジャパンフットサル練習会 色んな人がボールで繋がれる場所だった【コトバ12: ミウラユウキさん】

lacrosse/play/flow/好きなもの
多様性を認めることはちょっと苦しいけれど、認めてもらえることは大きな救いになる【コトバ03: なおさん】

ボールはスミス/ボールはボールはよく見るとスミスじゃない【コトバ05: 降屋さん】

見るものはボールじゃなく、相手の動き【コトバ11: TK1985さん】

Homeless World Cup can change the life

ホームレスワールドカップを知ったことで、私はいろんなことに触れることができた。世界のホームレスの皆さんについて、日本で支援をされている方々、当事者の方々。

私はいろんなことを新しく始めた。

英語の勉強、論文を読む、話を聞く。

私を変えてくれたものは、私を支えてくれる。

これまでもこれからも。

【コトバ08: 匿名希望さん】



コトバ01: 匿名希望さん (大阪) 朗読・絵: やまだりょうさん

コトバ04: なかにっちーさん 朗読・歌: なかにっちーさん
球から産まれたタマ太郎 今日ボクのところ、明日は君のところ 転がる数だけ笑顔が増える、増えるはず
球から産まれたタマ太郎 今日熱い国へ、明日は寒い国へ 跳ねる数だけ未来が変わる、変わるはず



イラスト: フルタアキヒコさん

SUMMICCO2021 クロージングトーク ダイバーシティカップからダイバーシティリーグへ

佐々 毅 × 糸数 温子 × 中山 崇志 × 鈴木 直文

(千葉『共に暮らす』フットボール協会)

(daimon)

(まきばフリースクール)

(ダイバーシティサッカー協会)

「オンライン・ダイバーシティサッカー・フェス SUMMICCO2021」の最終日は3人のゲストをお招きし、クロージングトークを実施。「ダイバーシティカップからダイバーシティリーグへ」と題して、各団体の大会運営の工夫や「ダイバーシティリーグ」の開催に向けた展望について話し合いました。

鈴木 今日、来年度以降に開催しようとしている「ダイバーシティリーグ」の構想についてお話ししていきたいです。今までは「ダイバーシティカップ」を東西合わせて8回ほど開催しているのですが、フォーマットを毎回少しずつ変えていて、その都度参加してくれる皆さんがどうしたら楽しめるかを考えながらやっています。最初はみんながワイワイできればそれでよかったんですけど、回数を重ねていくうちにサッカーが上手な人が増えてきて、ただ「参加して楽しかったね」ではなく、結構ガチな感じも増えてきました。

一方で、それについていけない方たちもいるので「チャレンジリーグ」と「エンジョイリーグ」の二つに分けるようになりました。最近では「ミニカップ」という大会を開催し、いろんなルールを入れることで、ちょっと違った楽しみ方や、普通のフットサルだと活躍できなかったかもしれない人が活躍できるような工夫をしてきました。

おかげ様で、これまで各大会にたくさんの方が参加してくださり、参加したいと思ってくださる方も増えています。ということで、1日の大会をやるよりも、リーグを展開するのがいいのではないかと考えています。皆さんがそれぞれ主催されている大会では、どんなことに気を付けて、あるいは、工夫していますか？

佐々 私たちのところでは「オープンリーグ」と「コルツァカップ」を開催しています。

「オープンリーグ」は障害の有無に関係なく集まって、その日にチームを作り、チームの名前と目標、みんなが楽しめるルールを決めます。四つん這いでやるとか、ゴールポストを当てたら1点とか、こういう場合は手を使ってもいいとか、あるいはそもそも手だけとか。そうなるとうちサッカーではないんですが、そういうルールをチームごとに出して、対戦相手と協議した上でどのルールを採用しようか決めて、とりあえずやってみる。そうすると、本当に楽しいものもあれば、「これはちょっと使えないな」みたいなルールも出ますが、そこを恐れないという。失敗してもいいでしょうということで、次にどうすればいいのか、「こうしたらいいかもね」と話し合うことでコミュニケーションが弾んでいく。その結果、1日経つと結構みんな仲良くなっています。子供、女性、精神障がい者の人、聴覚障がい者の人……いろいろな方が参加しているんですけど、元々これは精神障がいの当事者の発案なんです。コミュニケーションが苦手な人が多くて、「ではお話ししましょう」と言ったって、とても難しいわけですね。だけど、サッカーをしながら自然と会話が生れたり、アイコンタクトなどでコミュニケーションを取り合っています。チームの中でキャプテンとファシリテーターを決める際にも、当事者の人にやってもらいます。去年参加して「こういうことだな」と分かったら、次は進行のフォローをしてもらうことで、コミュニケーショ

ンを自然と進めていけるんじゃないかと。

一方で、「コルツァカップ」はガチの競技大会です。全国優勝を目指すチームが予選を戦うのですが、その中でもやっぱり力の差は出てしまいます。そのため、競技性の高い人とそうじゃない人がいて、上を目指す一部と、それはないけどゲームをしたいという二部、そしてウォーキングサッカーの三部に分かれています。特に三部は誰が来てもいいよという感じなので、当事者のご両親とかも参加していたのですが、純粋にスポーツを楽しんでもらいました。

糸数 私たちは5年間で1万人の方に関わりを持つということを最初に目標として設定していました。那覇市は大体1万世帯くらいが生活保護世帯なので、沖縄県内で一番大きい都市の、サポートが必要な人と同じくらいの数に関わりを持つことができたら、誰かが誰かのセーフティネットになることも可能なんじゃないかということで、まずは規模を大きくすることを意識しました。

「お母さんのためのフットサル大会」が看板なんですけど、そののれんをくぐっていくと、平日は「〇△□クラス」という不登校や、支援が必要な方々が集まるカテゴリーを設けています。土日は女子の大会で、「チャレンジカップ」という競技志向の強いお母さんや、学生さん、と言っても小中学生は本当にチームが少なく、大会がないこともあるので、そういう子たちも出られるような競技志向のカテゴリーがあります。あとは、オーバー35クラス、「おばさんゴーゴークラス」って言ってるんですけど、おばさんたちのクラスも。他には1dayの「エンジョイクラス」があって、これはとにかく大会よりもその後の飲み会を楽しみにしているような人たちのカテゴリーで（笑）。

このように競技のカテゴリーを細かく設定しながら賞金を出しているのが、それを元手に飲みに行くことができたりするわけですね。大会があることによって練習の機会を作り、練習の機会を作るというよりも飲み会の機会を作り、飲み会をし

て、また賞金を稼いで、また飲み会をして……といった感じですね。「飲み会が楽しかったから、またあれて飲み会の資金を稼ぎに行こうぜ」というように、きっかけを作っていくことが大事で、この晴れの舞台が日常生活の延長に、ガス抜きになってくれたらいいなと考えています。また当日の晴れの舞台は大きな会場を必ず借りて、観客席に自分のお友達や家族、サポートしてくれる人たちが集えるように、装飾も凝っています。

中山 まきばフリースクールでサッカーの活動を始めた頃、体を動かすことが好きな不登校・引きこもりを経験している子どもたちが来ていて、公園でサッカーボールを蹴っていると、近所のおばちゃんたちは「不登校なのにこんなに運動して偉いね、感動した」とものすごく感動していたんです。でも、ただボールを蹴っているだけなので感動するのは逆に腑に落ちないというか。「かわいそうな子たち、事情があって何もできない子たち」という見方を変えていきたいなと思い、真剣に何かに取り組むことをフリースクールの活動の中に入れて、フットサルを取り入れました。そして、練習の成果を発揮する場所を作るためにMKBカップを始めたんです。どんな状況の子どもたち、大人たちでも勝利を目指して大会に挑むことができる環境づくりをすることが始まりだったんです。

団体の中には様々な人たちがいるので、みんながみんなサッカーをするわけでもなく、体育館を借りて自由に遊んでいます。バドミントンをしたりバレーをしたり、カードゲームをしたり……最後の方にeスポーツ大会を開いたらみんなそっちの方に行っちゃって、フットサルの決勝戦を誰も見ていないということも（笑）。あとはバーベキュー場も借りて芋煮会をしたり、団子屋を出して団子を食べたりもしました。年に一回みんなでパーティーをやりましょうということで、他の団体さんの中にも毎年来てくれる人たちがいて「お、久しぶり。今年も一年どうだった？」と交流もしています。何年もやっていると、交流の場としても成



トモフト主催のオープンリーグ



那覇・国際通りを使ったdaimonのイベント

長していくかなと思い、MKBカップを開催しています。

他には「U-15クラス」を作ったり、女性や子どもが得点を決めたら3点にしたり、体格差があっても安全にできるような工夫をしながらやってきました。全員が必ず1分以上試合に出ることにしながら、総当たりを2周したんですよ。同じ相手と2回対戦できるわけです。そしたら、1回目が終わった後に「さっきはあれだったから今度はこう動こう」みたいな、2回目の対戦に向けた話し合いがどんどん生まれていました。全員が出なければいけないので「あのチームはやたら前半に上手い人ばかりを集めて来るな」とかいろいろ出てくるわけです。各々工夫の余地が生まれるから、それもリーグに繋がるのかなと思ったり。ルールを工夫しながらリーグ戦をやっていく中で最終的に年間チャンピオンを決めたら、サッカーがすごく上手いチームではなく、コミュニケーションの上手いチームが勝ったりして、単純な勝ち負けじゃないところで決まるのも面白いなと思います。

佐々 今の面白いですね。毎年ルールががらっと変わると、去年と同じことはできないです。尺度は一つじゃないから、その時々でやればいいかなみたいなね。

中山 そうそう。だからルールをクリエイティブできるチームが強いという傾向がすごくいいかなと。みんなのことを考えられるチームが強かったとか。そういうのがいいかなと思います。

佐々 どこでも生きていけそうですね。

中山 柔軟性というかね。試合の途中でルールを変えちゃったりね。このままじゃ負けるとかって「疲れたのでウォーキングにしていますか？」みたいな(笑)相手チームがいいと言えば、それもアリですよ。



MKBカップで振る舞われた団子

糸数 お話を聞いていると、クリエイティブさを出せる方が面白いんだなと感じますね。その人たちの特性が個性として活かされるようなことがルールで決められてるといいなと思いました。

鈴木 中山さんが大事にする自由っていう言葉、「フットサルフリーダム」。MKBカップのキャッチフレーズとしてもあったし、ブログで「サッカーで上達していくのも自由になっていくことだ」と書いていたことがあって、それもその通りだなと。できることが増えていくと、自由自在にサッカーができるようになっていく。それも自由だなと思いました。

中山 サッカーはそういう場を選べると思いません。ガチな人がガチでやるだけじゃなくて、いろんな楽しみ方をしてほしい。みんながそれをできる環境を目指したいなと思っています。サッカーに限らずですけど、障がいの有無にかかわらず、みんなが自由にできることを目指す。自分自身や地域がそうになっていくと、みんな楽しく生きていけるんじゃないかなと。あとはその状態を目指す、私たち職員も自由にやれますしね。

リーグ戦に関しては、試合ごとにルールが違っていいと思ってるんですけど、「こんなにルールが違っていいのか」という意見も出てくると思っています。でも僕らとしてはそれでいいんだと。サッカーをガチでやりたい人たちも、いろんなルールにすると「結構面白いな」ってなることもあるじゃないですか。だから、いろんな価値観に触れてみんなでやってみる。賛同する人もいればしない人もいる状態の方が面白いんじゃないかと思えます。サッカーをガチでやりたい人とそうじゃない人がぶつかって、どう収めるのか。リーグ戦を通して変化が生まれると面白いですよね。

佐々 不公平さを乗り越えて勝負に徹するというか、不利なら不利なりに考えるという。そこをリーグ戦としてやっていると面白いんじゃないかな



MKBカップでの交流の様子

と思います。そのとき1回で終わるわけじゃないですからね。

中山 1dayトーナメントはそれがはまらないと終わりになっちゃうけど、リーグだとそういう試行錯誤ができますよね。「次はこうしよう、あしよう」ということが、また日常に面白いことを生み出したりする。

糸数 一番大事にしたいのは「全国に友達ができる」ということなので、ご当地リーグで全然構わないし「他の地域に行ったらサッカーなのに手を使っていた」ということもアリだと思うんですよ。以前ダイバーシティサッカーの皆さんに来ていただいたときにタオルをお配りしたんですけど、そのタオルをまた皆さんが配ってくれたようで。沖縄から就活に行った大学生が、ビッグイシューの販売員さんがタオルを首から提げていたのを見て、交流が生まれたという話を聞きました。そういう出来事が全国各地で生まれたらいいなと思います。

中山 各地で全然ルールが違うのいいね。面白い。

糸数 「あの県に行ったらこういうことされた！まきばは何出してくるかわからないから危ないよ」みたいな(笑)。全然統一しなくてもいいかなと思います。「daimonカップのルールでやらされました」とか「フットサルフリーダムのルールでやらされました」とか、選手はみんな翻弄されてくれ！と思っています。

鈴木 知らないところで繋がるというのが全国で起きたらいいですね。

中山 コロナ禍で全国を移動するのは難しいので、各地で実験してルールを出し合って、それを別の地域でもやってみるという、各地で作ったご当地ルールを味わう会も面白そうです。それで、

みんなで感想をSUMMICCOで言い合う。

鈴木 できる地域では実験的にリーグ戦をやってみて「こういう案が出たよ」ってどんどん伝言して。

中山 団体の中の練習の日でもそのルールでやってみると「これがよかった」とか、「さらにこういうのが生まれたよ」となると面白そうですね。

鈴木 ダイバーシティカップができるような状況だったら、そのときに持ち寄ってもらって、千葉のベストルールと宮城のベストルールを実践してみたり。

中山 M-1みたいにどのルールが一番面白いのか、「これが今年1年かけて練り上げたうちのルールです」ってね。それはいいかもしれない。

佐々 違う意味でのルールブックができますよね。ルール集みたいな。ここでは面白そうだと話してるけど、実際にみんなが面白いと言ってくれるかどうかはわからないので「こんなに面白いよ！」っていうプロモーションの仕方を考えないとね。

糸数 楽しさをどう伝えるかというのは難しいので、運営者と参加団体がセットになって、自分たちが楽しむ場を自分たちで設計すると、皆さん楽しく参加されると思います。あとは事前に代表者会議をやっておくと、ルールのすり合わせとかもできてオペレーションも楽になりますし、そこで「こういう楽しみがあるよ」というのも伝えられて、お互いに「楽しかったよ」という口コミが生まれたら、楽しさも広がっていくんじゃないかなと思います。

(文：高橋優奈)



野武士ジャパンの活動

「野武士ジャパン」は、ホームレス状態の人やその経験者を中心に、多様な人が集うサッカーチームです。東京・大阪それぞれで月に2度の練習を継続し、ダイバーシティサッカー協会はその運営をサポートしています。

2021年度は、昨年度に引き続き、度重なる緊急事態宣言などで練習を休止することも多かったですが、東京・大阪で計17回、練習をすることができました。また、通信機器の貸与を通じて、オンラインプログラムへの参加環境を整えたほか、SHARP労組主催のフットサル大会に参加するなど、できる活動を継続しました。



野武士ジャパン東京チーム



野武士ジャパン大阪チームの練習風景

通信機器の貸与プログラム、始めました！

オンラインプログラムの実施に伴い、パソコンやインターネットにアクセスできないメンバー4人に、助成金を活用してChromebookとポケットWi-Fiの貸出事業を始めました。対面での練習が難しい時には、オンラインでのミーティングやエクササイズの際に活用していただきました。

利用者の声

佐々木さん

最初は、本当に立ち上げ方も何もかもわからなくて、コーチの佐竹さんと一緒に5、6回ほど練習をしました。スマホも一応持っているけど、画面が大きいので便利だなと思っています。一通り使えれば良いけど、今はまずオンラインミーティングができるだけで十分。でも、実は最近FacebookとInstagramを始めたので、それにも活用してるよ。ゆくゆくはオンライン飲み会をしたいなー。



花瀬さん

人生で一度もパソコンを触ったこともなかったので、一から全部教えてもらいました。主にメールのチェックとビデオ通話のZoomを利用しています。世界のどこからでも参加できるのは画期的で、最初に繋がった時は感動したなあ。今では、小学生でもやっているぐらいだと思うが、自分ももう少し使えるようになりたいなど、パソコン講習に行き始めたんだよ。実はいまだに操作は全部音声入力で行っていて、キーボードの押し方もわかっておらず（笑）、ブラインドタッチだけ？ あんなのができたらカッコいいなと思って。



寄付サポーター&ボランティア大募集！

ダイバーシティサッカー協会の活動は、みなさまの寄付やボランティアで支えられています。わたしたちのイベントや日々の活動の参加者には経済的な余裕のない人も多く、参加費を極力低く抑える必要があります。そのため、これらの活動は各種の助成金、個人や団体からの寄付金、そしてボランティアのみなさんの活躍に依存しています。

みなさまの寄付金によって、ホームレス、ひきこもり、精神障害、依存症など多様な社会的困難を抱えた人たちに、スポーツを通じた居場所を安定的に提供できるようになります。また調査研究を通じて多様な社会的困難についての理解を深め、わたしたちの活動をよりよいものにしていくことも可能になります。ぜひご支援ください！

また、ボランティアも募集しています。イベントレポートの執筆や写真撮影、大会や練習運営のサポート、SNS広報など、ご興味のある方はお気軽にお問い合わせください！

●寄付サポーターになりたい方はこちらから <https://diversity-soccer.org/donation/>

●ボランティア希望等のお問い合わせはこちらから info@diversity-soccer.org



会計情報 2021年4月~22年3月

◎経常収益	3,216,687円
受取会費	671,000円
受取寄附金	1,135,680円
受取助成金	1,300,000円
(2022年度活動助成金含む)	
事業収益	0円
その他収益	110,007円
◎経常費用	1,397,531円
事業費	1,256,563円
(うち人件費)	0円
管理費	140,968円
(うち人件費)	0円
◎当期正味財産増減額	1,819,156円
◎前期正味財産額	557,105円
◎次期正味財産額	2,376,261円

2021年度は、以下の助成を受けました

- ・若者協同実践全国フォーラム
「若者協同実践草の根助成プログラム」
- ・社会福祉法人東京都共同募金会
令和3年度 赤い羽根 新型コロナ感染下の福祉活動応援 全国キャンペーン「いのちをつなぐ支援活動を応援！～支える人を支えよう～」
- ・住友生命健康財団
「2021年度 スミセイ コミュニティスポーツ 推進助成プログラム チャレンジコース」

役員&アンバサダー

代表理事	鈴木 直文 (一橋大学 教授)
理事	川上 翔 (事務局)
	竹内 佑一 (事務局長/PSIカウンセリングルーム 代表)
	長谷川 知広 (ダイバーシティサッカー協会 創設者)
	蛭間 芳樹 (銀行員/NPO法人ビッグイシュー基金 理事)
監事	青木 弘達 (株式会社リヴァ 取締役)
	油井 和徳 (NPO山友会 副代表)
アンバサダー	星野 智幸 (小説家)

メディア掲載情報一覧

2021年	
4月11日	BIG ISSUE ONLINE「サタデー・ナイト・ダイバー#5」
5月21日	週刊金曜日1329号 「星野智幸さんインタビュー」
8月10日	HWC Media Team「Beyond the Stadium Tokyo&Japan」
2022年	
1月10日	The Japan Times 「Kicking for inclusion: How soccer is helping homeless」